第Ⅳ部門　　詩仙堂の景観特性についての研究

京都大学工学部　学生員　○西本慎太郎　　京都大学工学研究科　正会員　　出村　嘉史
京都大学工学研究科　正会員　　川崎　雅史　　京都大学工学研究科　正会員　　樋口　忠彦

1. はじめに

景観を把握するための技術的方法として,「眺望景観」と「囲繞景観」がある．日本では古来より，主に山麓部を中心して神社仏閣や集落が設けられてきた歴史があり，無意識ながら囲繞景観が重要視されてきたといえる．また，京都を取り囲む山裾の地形は起伏に富んでおり，囲繞景観を重視した住環境を創る上では，決して軽視できない価値を持っているといえる．

以上を踏まえ，本研究では，地形を用いた優れた意匠が見られる空間として，京都洛北の詩仙堂に着目した．予備調査の結果，詩仙堂の空間はその土地固有の地形条件を考慮した上での３次元的な景観的操作に優れており，自然との間の取り方にも洗練された意匠がなされていることが分かった．そこで本研究は，詩仙堂を対象として，生活空間における地形・建築・庭園が複合的に関連した，眺望景観・囲繞景観の構造を明らかにすることを目的とした．

2. 詩仙堂とその内部の景観構造について

京都市左京区一乗寺に位置する詩仙堂は，寛永十八年（1640 年）に石川丈山が自らの隠遁の為に設計し，それから三十年間もの隠遁生活を送った住居である．著者がヒアリング調査を行った結果では，当時から敷地配置や地形などに大きな変化はないとされる（図１）．

詩仙堂は花折断層上にあり，敷地内部や周辺には大小様々な凹凸地形が見られる．このことは詩仙堂が造成当時,「凹凸窠（おうとつか)」と呼ばれていたことからもわかる．この地形の中で詩仙堂は，凹地形にアプローチを設け，凸地形の上に３階建ての建築をおき，谷地形の中を庭園としている（図２）．そしてこれらの敷地配置には，以下のようにそれぞれ場所ごとの地形を活かした景観操作がみられた．

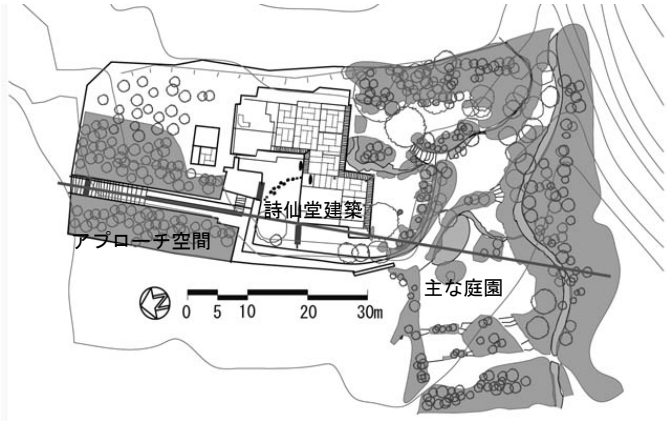

図１　詩仙堂平面図

図２　詩仙堂断面図（図１の線上）

（１）庭園における自然との間の取り方

詩仙堂の庭園において，空間構成や指向性，囲繞感の変化などを調べた結果，斜面や段差によって区切られた明確な階層性があることが分かった(表１)．さらにこれらの階層は，植生に狭く挟まれた道や曲がった石段など，視界操作による分節によって区切られており，奥の階層に行くにつれて徐々に自然に近づいていくような間の取り方がなされていることが示唆された．

場所	囲まれ感	広さ（長辺）	景物	可視不可視
方丈横の庭園	西側にしか樹が無いため，低い．	10m 前後と狭い．	滝や築山がある．	方丈庭園：×，斜面庭園：× 詩仙堂：○
斜面庭園（上段）	山側以外は低いが，高い木が多い．	10m 前後と狭いうえ， 周囲の高い木が目立つ．	特に無し．	詩仙堂：△，平地が目立つ
斜面庭園（下段）	植生による囲繞感が高い．	20m 前後と広い．	池や菊がある．	詩仙堂：×,植生が目立つ

表１　詩仙堂庭園における階層性

Shintaro NISHIMOTO, Yoshihumi DEMURA, Masashi KAWASAKI and Tadahiko HIGUCHI

（２）詩仙堂建築における視点場の分析

詩仙堂建築においては，主に１階と３階に視点場が存在する．これらそれぞれの景観について囲繞感や可視不可視などから分析を行った結果，１階と３階では空間の性質に明らかに違いがあることが分かった．

１階における景観は，植生や地形に囲繞された視点場から敷地内を眺めるものであり，その囲繞空間の広さは，住居としてふさわしいヒューマンスケールであるといえる．特に洛中がある西南方向に関しては，隆起があるため互いに不可視となっている．以上から，１階は住むのに適した落ち着ける空間になっているといえる．

また３階における景観は，部屋が狭く，四方に窓がついているために１階と違って落ち着くには適さないが，山裾という地形を活かして，山を背後にしながら，遠く離れた洛中や西山まで見渡すことができるような，非日常的な大スケールの眺望をもっていることが分かった．

そしてこの性質の違いは，丈山の敷地デザインによって生み出されたものであることが示唆された．すなわち丈山は，山裾の傾斜と微地形を利用した上で，南の隆起によってぎりぎり隠される場所に詩仙堂を立地し，その凸地形の上に詩仙堂を建て，さらにそれを３階建てにすることで，１階では地形と植生に囲まれた「囲繞が優れた景観」，３階では都や西山まで望めるような「眺望が優れた景観」を，わずか数ｍの上下で体験できる装置として詩仙堂をデザインした可能性が示唆された（図３）．

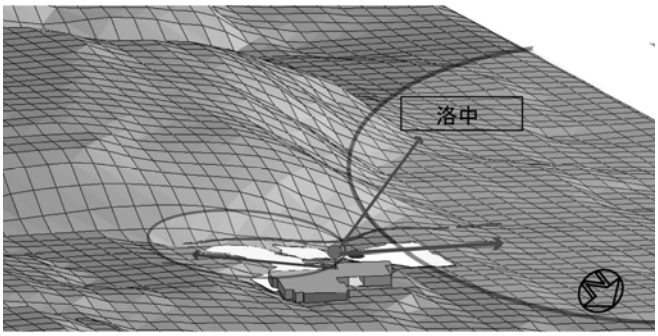

図３　詩仙堂建築と南の隆起との関係

（３）アプローチ空間における境界

アプローチ空間では，竹林に囲繞された空間前後で視野や囲繞感などに変化がある箇所に着目した分析を行った結果，その変化にはアプローチ空間における地形の段差が境界として働いていることが分かった（図４）．また，アプローチ空間全体が大きな一つの境界として「外」と「内」を結ぶ意味をもっていることを，丈山に「小有洞」と名付けられた門の名称から推察した．

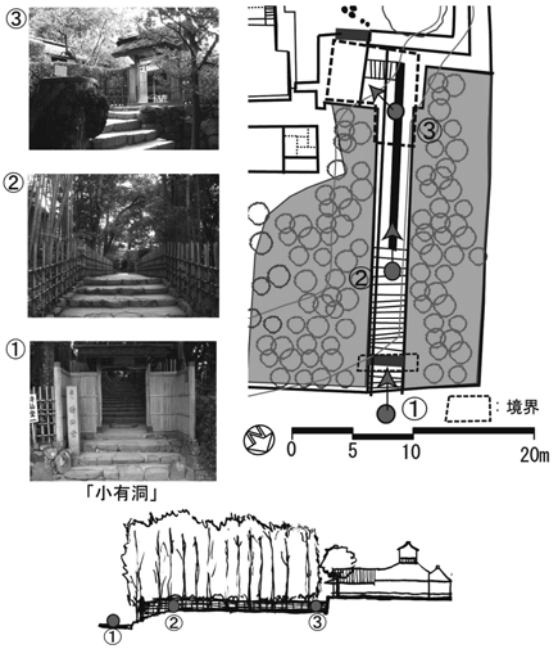

図４　アプローチ空間の境界

3. まとめ

本研究では，詩仙堂の景観構造について主に地形に着目して検証を行った結果，以下の２点を明らかにすることができた．

①詩仙堂では土地固有の地形を用いた視界操作がなされており，それらは自然との間の取り方に貢献しているだけでなく，境界として働き，狭い空間に多様性を与えている．

②詩仙堂は，地形･建築･庭園を複合的にデザインすることで眺めの閉鎖と開放を操作し，小スケールの隠遁的性格と大スケールの眺望的性格を結びつける装置としてデザインされた可能性が示唆された．

また詩仙堂に見られるこれらの景観的工夫は，山麓部における住宅地や別荘，リゾート開発といった現代の景観操作手法にも寄与しうるものと考える．